

## インフルエンザ - 2008/2009 シーズンの流行 -

(1)2008/2009 シーズンの季節性インフルエンザは、流行期間が長く、二峰性であった(下図参照)。流行の主流となったウイルスは、A/H1N1 亜型(A ソ連型)であった

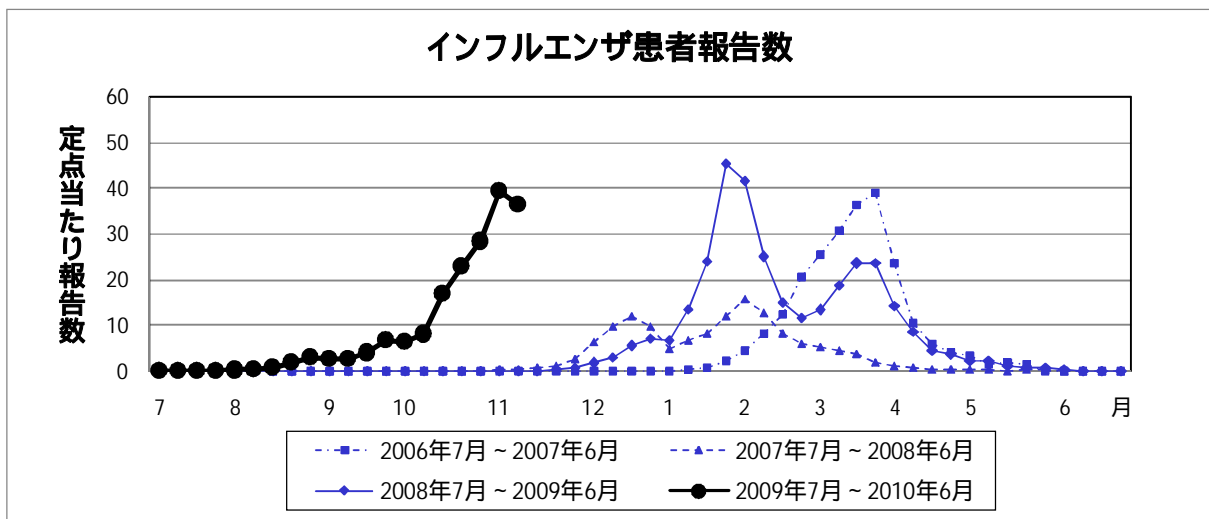
流行の始まりは 2007/2008 シーズンより幾分遅かったものの、規模は大きなものとなり、最初のピーク(2009 年第 4 週)の定点あたり患者数は 45.25 に達しました。その後患者数は一旦減少しましたが、第 9 週から再び増加し、第 12 週に 2 度目のピーク(23.66)となりました。

全国で分離されたウイルスの 49%が A/H1N1 亜型、27%が A/H3N2 亜型、24%が B 型でした。

(2)オセルタミビル耐性マーカー変異 A/H1N1(ソ連型)ウイルスの出現

2008/2009 シーズンに全国で分離、解析された A/H1N1 亜型のほとんど(1452 株中 1447 株、99.7%)にオセルタミビル(タミフル)耐性マーカーに変異(H275Y)が認められました。

\*「オセルタミビル耐性マーカー」：オセルタミビル耐性の A ソ連型ウイルスでは、インフルエンザウイルスの持つノイラミニダーゼ蛋白の 275 番目のアミノ酸が、ヒスチジン(H)からチロシン(Y)に変化しているため、分離されたウイルスの遺伝子を解析してこの変異の有無を調べているものです。



今年 4 月にメキシコで、5 月には国内でも確認された豚由来 A/H1N1 亜型(新型インフルエンザ)ウイルスが、秋季に入ってから急速な拡がりを見せています。上図における 2009 年の患者報告数の上昇は、ほとんどが新型インフルエンザウイルスによるものと思われます。

現在まで、新型インフルエンザウイルスには病原性の変化に大きく関わるような変異は無いようですが、今後もウイルスの性状変化の有無を慎重に監視していくことが重要です。

インフルエンザに関する最新の全国情報は、国立感染症研究所感染症情報センターのホームページ (<http://idsc.nih.go.jp/index-j.html>) でご覧になれます。